

M-GTA 研究会 News Letter No.97

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（株式会社アクセライト内）

メンバーリストのアドレス：members@m-gta.jp

研究会のホームページ：http://m-gta.jp

世話人：阿部正子、倉田貞美、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、田村朋子、丹野ひろみ、都丸けい子、長山豊、根本愛子、林葉子、宮崎貴久子、山崎浩司（五十音順）

相談役：小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾（五十音順）

<目次>

◇第 86 回定例研究会報告

【第 1 報告】 3

ゴメス由美：英語を外国語として学習している英語上級レベルの日本人大学生が内容重視型グループプロジェクトにおいて他メンバーと関わり合いながら協同で課題を達成していくプロセス

【第 2 報告】 11

直原 康光：面会交流に対する母親の受け止めの変化プロセス

【第 3 報告】21

岸田 泰則：大企業に勤務する定年再雇用者のジョブ・クラフティング行動に関する研究

◇各地の M-GTA 研究会活動報告31

中部 M-GTA 研究会の活動報告

◇近況報告33

佐名木 勇（看護技術学／慢性疾患患者のセルフマネジメント）

◇次回のお知らせ34

◇編集後記34

◇第 86 回定例研究会報告

【日時】2019 年 5 月 18 日（土）13：30～18：00

【場所】東京大学駒場 1 キャンパス（21KOMCEE East K212 教室）

【出席者】91 名

青木 聡(大正大学)・浅川 和美(山梨大学)・天野 敏江(国際医療福祉大学)・荒居 康子(関東学院大学)・安藤 晴美(山梨大学)・池田 稔子(日本赤十字看護大学)・池田 紀子(ルーテル学院大学大学院)・岩下 好美(KCJ GROUP (株))・宇田 美江(青山学院女子短期大学)・大谷 直美(国際医療福祉大学大学院)・大橋 重子(横浜国立大学大学院)・奥田 孝之(奥田技術士事務所)・小野 敬済(りはっぴいの訪問看護)・金井 秀介(立命館アジア太平洋大学)・蒲生 澄美子(埼玉医科大学短期大学)・烏山 房恵(一橋大学)・唐田 順子(国立看護大学校)・河本 恵理(山口大学)・岸田 泰則(法政大学大学院)・木下 康仁(聖路加国際大学)・清田 颯子(東京経済大学)・久保田 真人(M&Mコミュニケーションズ有限公司)・倉田 貞美(浜松医科大学)・後藤 喜広(東邦大学)・小林 茂則(聖学院大学)・ゴメス 由美(聖徳大学)・小山 道子(日本医療科学大学)・酒井 理香(了徳寺大学)・坂本 治子(国際医療福祉大学大学院)・佐川 佳南枝(京都橘大学)・櫻井 理恵(埼玉県立大学)・櫻井 一江(亀田医療大学)・佐藤 理恵子(東京大学)・佐名木 勇(群馬県立県民健康科学大学)・直原 康光(筑波大学)・島田 徳子(武蔵野大学)・嶋津 多恵子(国立看護大学校)・正田 温子(早稲田大学)・白子 英治(天本病院)・鈴木 佳代子(国際医療福祉大学)・竹下 浩(筑波技術大学)・谷口 直子(株式会社 WITH)・谷田 悦男(埼玉県立所沢特別支援学校)・田村 朋子(清泉女子大学)・丹野 ひろみ(桜美林大学)・張 銀暁(武蔵野大学)・張 氷穎(東京大学)・張 丹(武蔵野大学大学院)・長南 里歩(女子栄養大学大学院)・辻 あさみ(和歌山県立医科大学)・寺崎 伸一(SOMPO ケア 川崎日進)・都丸 けい子(聖徳大学)・中込 彩香(山梨大学)・永島 すえみ(沖縄県立看護大学)・永田 夏代(株式会社湘南ユニテック)・長山 豊(金沢医科大学)・西岡 啓子(獨協医科大学)・西平 朋子(沖縄県立看護大学)・西巻 悦子(早稲田大学)・根本 愛子(東京大学)・箱崎 友美(群馬大学)・橋爪 みゆき(大正大学大学院)・橋本 友美(首都大学東京)・服部 憲児(京都大学)・濱田 純子(東京大学医学部附属病院)・濱谷 雅子(首都大学東京)・林葉子((株) JH 産業医科学研究所)・原 節子(セリエ新宿クリニック)・原 理恵(純真学園大学)・平川 美和子(弘前医療福祉大学)・平塚 克洋(上智大学)・廣瀬 明子(NPO 法人脳外傷友の会ナナ クラブハウスすてっぶなな)・福元 公子(社会福祉士事務所ライトハウス)・坊垣 友美(東京純心大学)・堀切 大器(ダイヤル・サービス株式会社)・マクドナルド ダレン(大東文化大学)・増田 優子(大阪大学)・松戸 結佳(早稲田大学)・宮崎 貴久子(京都大学)・宮下 万有美・宮原 淳(岐阜聖徳学園大学)・村上 杏子(東京有明医療大学)・山崎 浩司(信州大学)・山本 秩恵子(筑波大学)・横森 愛子(山梨県立大学)・横山 昇・横山 豊治(新潟医療福祉大学)・吉羽 久美(首都大学東京)・依田 純子(山梨県立大学)

【第1報告】

ゴメス由美（聖徳大学）

GOMEZ, Yumi, M.S.Ed.: Seitoku University

英語を外国語として学習している英語上級レベルの日本人大学生が内容重視型グループプロジェクトにおいて他メンバーと関わり合いながら協同で課題を達成していくプロセス

The Process of Collaborative Interactions in a Content-Based Group Project by Upper-Level Japanese University Students in the English as a Foreign Language Context.

1. 研究の背景と目的

従来の日本の英語教育においては、主に文法的な知識の正確性を追求するという教育が主流であった。しかし、実際の社会ではそういった文法知識の正確さより、意味のある文脈の中で文法知識を効果的に使い、他者とコミュニケーションが取れる力が必要とされている。このことから、現在日本の高等教育における英語教育では、英語を目的達成のため、またはコミュニケーションのツールとして使える力をつけるため、意味のある文脈の中で英語を学習させる内容言語統合型学習（CLIL）やプロジェクトベース学習（PBL）などの学習方法が積極的に取り入れられはじめて来ている。

CLILにおける指導・学習法では（e.g., Lyster, 2007; Coyle, Hood, & Marsh, 2010; 渡辺, 池田, 和泉, 2011）、外国語を教科などの内容のあるタスクプロジェクトなどを通して学習させることで、教科における認知力と外国語能力の両方の力を養う事が出来ると考えられている。また、相互主体的に学習者同士が関わり合い、自律的かつ能動的にゴールに向かって知識を築いていくことを基本的理念とする PBL 学習においては、学習者は知識を仲間と再構築していく参加者になり、「一人ではできない発想や知恵、一人ではできない行動や成果が、相互作用を通して個の総和を超えた協働作用を生み出す」（広石, 2005）と考えられる。これらのことから、CLIL や PBL によって、思考力やコミュニケーション力、協同する力など、21 世紀スキルとして挙げられている多くのスキル(Fadel, 2008)を同時に育成することの可能性が注目されている。このように、相互的な関わりを軸として、実社会に関連する内容を題材に、互いに協力して取り組むことで、学習者は外国語をまさにツールとして学習し、加えて内容に関する知識も二次的に学習できると考えられている。CLIL や PBL はコミュニケーション能力の育成を重要とする外国語科目においては大いに注目されるべき指導・学習法である。

しかし、先行文献においては、多くの課題も指摘されている。CLIL はコミュニケーションの内容と意味に重点が置かれるので動機づけになり、思考を促す利点がある（Lightbown & Spada, 2006）反面、すべての内容を対象言語である外国語で行わせた場合、学習者にある程度の語学力がすでに備わっていないとうまく機能しない（Pinemann, 1998）上に、外国語を使って思考活動を行わせた場合、母語で行う時とは違って認知能力の低下が発生するという外国語副作用（高野, 2014）という弊害も報告されている。また、こういった協同的

な関わりを基盤に行われる学習活動においては、グループが効果的に課題を達成するための基本的要素である、促進的相互依存関係、対面的な相互作用、個人の責任、小集団の運営技能、集団改善手続きが（Johnson, Johnson, & Holubec, 1994）がしっかりと枠組みとしてデザインされ、グループ内で運営される必要があることも（Cohen & Lotan, 2014）指摘されている。

日本のように、英語を外国語として指導・学習する環境においては、CLIL や PBL を組み入れた外国語教育の効果やその実態における研究はまだまだ浅く、こういった指導・学習法が従来の日本の英語教育でなしえなかった効果をもたらすか否か、またそのためにどのような指導者の力量が必要か等の実践上の見識は極めて少ない。こういった現状から、日本の高等教育の現場で、分析、評価、統合といった、高レベル思考（Anderson, Krathwohl, & Airasian, 2001）を必要とする内容重視型のグループプロジェクトにおいて、日本の大学生が互いにどのように関わり合い、課題に取り組んでいるかのプロセスを明らかにすることで、日本の英語教育にこういった指導・学習法をさらに組み入れていく際に有益な見識を提供できるものとする。

2. M-GTA に適した研究であるかどうか

主に教室内でのグループプロジェクトという学習活動であるが、学習者自身がグループのメンバーと協同で自律的に課題を見つけ、相互に密接にかかわり合いながら課題を進め、目標を達成していかなければならない。このことから、この研究はプロセス性を有する社会相互作用にかかわる研究といえる。また、教育現場における学習者同士のかかわりに焦点を当て、そこから得られる見識を教師の学習者への指導やカリキュラム作成に生かすことができるという実践的活用性も持っている。以上のことから、この研究は M-GTA に適した研究であるとする。

3. 研究テーマ

英語を外国語として学習している日本人大学生の内容重視型グループプロジェクトにおける協同活動プロセスを明らかにし、対象者同士の相互のかかわりの中で課題に関する協同的な深い思考活動である議論を促すもの及び妨げるものは何かという事を明らかにする研究。

4. 分析テーマへの絞り込み

当初は分析テーマを「内容重視型グループプロジェクトにおいて、英語を外国語として学習している日本人大学生は、他メンバーとのかかわりにおける自分と他メンバーの行動・言動をどのように内省しているか。」としていたが、スーパーバイズを受け、スタートとゴールは何かを考えた。その結果、スタートは、「対象者がこのプロジェクトを達成するためにどのように他メンバーと関係性を築いていこうかと思った瞬間」で、ゴールは「対象者が課題を達成した瞬間」と設定した。それによって、分析テーマを「英語を外国語として学習している英語上級レベルの日本

人大学生が内容重視型グループプロジェクトにおいて他メンバーと関わり合いながら協同で課題を達成していくプロセスの研究」に変更した。

5. データ収集法と範囲

調査対象者：

調査協力者は関東の私立大学において、選択科目である上級者向け時事英語リーディング&ディスカッションを履修している2年生～4年生の大学生16名の内、研究参加協力に同意した12名である。調査協力者にはインタビュー実施前に研究の趣旨、プライバシーの保護、インタビュー調査のICレコーダー録音に関する説明を行い、同意を得て、2018年10月～11月の間で半構造型インタビュー調査を実施した。インタビューは対象者が在学する大学のキャンパス内で実施、インタビュー時間は一人約60分だった。

プロジェクトタスク内容の概要：

このプロジェクトは、15回授業の内、後半の5回にわたって行うグループプロジェクトである。学生はあらかじめ調べてきた時事問題に対する似通った興味を持った者同士4人組でグループを作る。全5回からなるプロジェクトの1回目は、グループ作りとグループ内でのプロジェクトプランニング、2回目から4回目は各グループ内でグループ活動、5回目は各グループ10分の発表を行う。参加者に提示するタスクの概要は、1) 国際レベルの時事問題(issue)を一つ提案し、2) その問題の背景を説明し、3) その問題に対する日本と世界の取り組みを説明し、4) その問題に対する対処策を社会の様々な立場にいる人の視点から考え、グループの意見を提案する、というものである。

調査協力者の属性：

性別	学年	TOEIC 点数	海外経験合計年数	学部
男	2年	730	なし	社会学部
男	3年	850	4か月間(米国)	異文化コミュニケーション
男	3年	710	6か月間(英国、ニュージーランド)	異文化コミュニケーション
男	2年	850	2か月間(フィリピン)	国際経営
男	2年	785	2週間(豪州)	経営
男	2年	755	2週間(カナダ)	政治
女	2年	925	2年間(米国)	国際経営
女	4年	965	3年間(ジョーダン、ブータン)	数学
女	2年	740	1か月間(米国、英国、ロシア)	現代文化
女	2年	810	3週間(米国)	英米文学
女	2年	935	1年間2週間(カナダ、米国)	異文化コミュニケーション
女	3年	730	1か月間(カナダ)	英米文学

インタビューガイド：

- グループプロジェクトをやることの自分にとってのメリットとデメリットは？

- 自分はグループにどのように貢献できたと思いますか？
- 貢献するために意識的に行ったことはありますか？
- 自分はグループメンバーにどのように見られていたと思いますか？
- 自分はグループのメンバーにどのように見られようとしていましたか？
- グループのメンバーとのかかわりの中で、自分の中では不本意だと思ったような場面はありますか？どのような場面で？
- グループのメンバーの発言や行動で影響を受けたものはありますか？それはどのようなものでしたか？
- グループそれぞれのメンバーは今回のプロジェクトでグループにどのように貢献していましたか？
- グループで決めたことは互いの合意の上で、ちゃんと口頭に出して確認していましたか？言葉に出さないけど空気で何となく決まったようなことはありましたか？
- どういう時に日本語を使いましたか？どういう理由で？
- グループが深く内容を掘り下げてプロジェクトを進めていくために必要だと思う事は何か？今回のプロジェクトでそれは行われましたか？

6. 分析焦点者の設定

大学の英語授業において内容重視型グループプロジェクトに取り組むことのある英語を外国として学習している日本人大学生

7. 分析ワークシート（回収資料）

8. カテゴリー生成（回収資料）

9. 結果図（回収資料）

10. ストーリーライン（回収資料）

11. 理論的メモ・ノートをどのようにつけたか、またいつどのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか。

理論的メモは概念に対してバリエーションを抽出するたびにそのバリエーションの内容で面白いと思ったこと、分析テーマに関連していると思う部分、すでに抽出した概念に当てはまるのかどうか、類似例はあるか、対極例はあるか、などを考えながら、できるだけこまめに書くようにした。

図を作成するに当たっては、まずはカテゴリー名を書いたポストイットをすべてホワイトボードに貼り、カテゴリー同士がどう関係しているのかを考えた。建設的な議論に至る場合

と十分な議論なしの合意に至る場合の状況の違いに着目し、それぞれの状況で何が議論を促進させ、何が議論の妨げになっているのかという視点でカテゴリーと概念を比較していった。その中でこの二つの状況を隔て分ける中核概念は何かという視点で注目すると、「親密化」が浮かび上がってきた。この「親密化」への動きが乏しい状況では、対象者は建設的な議論につながる行為に至らないと考えた。この「親密化」が、木下先生がおっしゃる、現象特性である「うごき」(木下、2007)ではないかと考えた。そして、その「うごき」を中心として、全体の関係性を繋げていった。

この「うごき」は、インタビューを実施している際から少しぼんやりと見えてきいたのだが、カテゴリーと概念を生成後、実際にそれぞれの概念をポストイットに書いてホワイトボードで視覚的に比較しているときに目に飛び込んでくる形ではっきりと見えてきた。

木下先生が現象特性は「大きく捉えれば領域密着型理論からフォーマル理論につながるヒントにもなります」(木下、2007)と言われているように、今回の教室内の学生同士の社会相互作用は現実社会の相互作用にも当てはまるのではないかと考える。何らかしらの個人の心の葛藤が、協同作業における建設的な議論を妨げる可能性がある。しかし、自己もしくは他者の働きかけにより親密化が促進されれば、互いの協同的な意識や行動がスパイラル的に建設的な議論を促進し、個人に学びをもたらすと考えられるのではないかと考える。

1 2. 分析を振り返って、M-GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点など。

- 細かく概念を生成していたら、概念の数が膨らんでしまった。類似概念を統合することで、整理をしていったが、それでよかったのか？
- 分析テーマに「深い思考活動のプロセス研究」か「協同活動のプロセス研究」のどちらを入れようか迷った。ここで言う「思考活動」とは議論を通して互いに深く考え合うという行為を指しているが、「思考活動」という用語からは、表面上に現れない個人の頭の中で行われている思考自体を連想させてしまうかも知れないと思い、今回の分析テーマの中では使用しなかった。しかし、ここでは議論だけに焦点を当てているわけでもなく、議論という行為を含む互いに深く考え合うという行為も指している。「思考活動」という用語はやはりふさわしくないのか？

1 3. 会場からのコメント概要

発表の際に頂いたコメント：

- 分析テーマのスタートの設定が、「対象者がプロジェクトを達成するためにどうやって関係を築こうかと思った瞬間」となっているが、相互作用の学びの場では関係性を築こうという概念がなかったところからそういう態度が出てくる場所というのも重要なのではないかと。もう少し前に設定した方が相互作用が出てくる過程がより分かりやすく出てくるのではないかと。→ごもっともなご指摘です。よく考えてみれば、関係性を築こうと意識するまでの過

程にも相互作用はきっと働いていることと思います。また、「瞬間」という時間の区切りは少し細か過ぎるのではないかと言うご指摘もございました。これからの分析の際に見直しで行きたいと思います。

- 言語習得ではなくグループワークに焦点が当たりすぎているのではないか。英語教育においてどのようなメリットが学生に生まれるかをもう少し見た方が良いのではないか。→協同学習の側面に焦点が当たりすぎているというご指摘は、全くその通りだと思います。自分の中では、英語学習者の視点を「心の葛藤」というカテゴリーに入れたつもりでしたが、結果として、「心の葛藤」の中に英語学習者に特有の相互作用における様々な葛藤が埋もれてしまっている事に気づかされました。この点は、多くの先生方も配付資料へのコメントでご指摘くださいました。分析対象者が英語学習者である大学生という重要な点を見落とししておりました。彼（女）らにとってこの分析が利益になるものでなければ意味がないということに立ち返り、再度データに向き合っていきたいと思います。
- PBL を英語の授業で使うことの目的は何か？→英語の授業において、グループで取り組むことの目的と価値が何なのかという説明が足りていませんでした。また、結果図にそれが現れていないということが一番の問題だということにも気づかされました。大変貴重なご意見をありがとうございました。
- 母語ではない言語でアクティブラーニングをすることと、母語でアクティブラーニングをする事の違いが結果図から見えてこない。→結果図のコア部分が何であるべきなのかということを深く考えさせられたご指摘でした。「親密化」という概念に引っ張られすぎてしまい、それに固執してしまいました。それによって、本当に重要な部分は何なのかということを見誤っていたと気づかされました。英語学習者が PBL を通して言語習得していくプロセスを見ていくということが本来の研究目的であったはずが、現存の理論に引っ張られてしまい、本当に明らかにしたい独自の視点を全く盛り込めていなかったということがはっきりと分かりました。分析テーマを再検討して、データを見直して行きたいと思っています。
- カテゴリー生成の方法が間違っている。→大変貴重なご指摘ありがとうございます。概念が 81 個になってしまった原因もここにあったのだと分かりました。分析テーマからそれに導かれるように概念を生成していくということが良く理解できていなかったからだと思っています。KJ 法や分類法の分析方法に近いことをやっていたのでは、というご指摘も頂きました。それが理由で、プロセスという側面が結果図に全く現れていなかったのだということに、今になって気づかされました。再度、M-GTA の書籍や論文を読み直し、データの再分析を行っていきたいと思っています。

14. 感想

このたびは大変貴重な機会を頂きどうもありがとうございました。いかに自分が M-GTA 分析を自己流で行っていたのかを実感させられる機会になりました。今回発表をさせて頂いたことで、自分一人で分析を行っていたときには決して起きなかった新たな発見を得るこ

とが出来ました。ご多忙中、私のために時間を割いてスーパーバイズを行ってくださった田村朋子先生には大変お世話になりました。また、当日多くの気づきを与えてくださった先生方の建設的なアドバイスに心から感謝致します。回収資料にも多くの先生方がたくさん書き込みコメントをしてくださいました。皆様のご意見を一つ一つ感謝を持って読ませて頂きました。本当にありがとうございました。今回のこの貴重な経験をもとに、さら M-GTA についての理解を深めるための努力をして邁進していきたいと思っております。これからも引き続き皆様のご指導をいただけますと幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

方法論の参考文献

- 小倉啓子 (2007). ケア現場における心理臨床の質的研究-高齢者介護施設利用者の生活適応プロセス. 弘文堂.
- 木下康仁 (1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ: 質的実証研究の再生. 弘文堂.
- 木下康仁 (2005). 分野別実践編, グラウンデッド・セオリー・アプローチ, 弘文堂.
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂.
- 木下康仁 (2009). 質的研究と記述の厚み: M-GTA・事例・エスノグラフィーグラウンデッド・セオリー・アプローチ. 弘文堂.
- 戈木 (2008). クレイグヒル・滋子 (編), 「質的研究方法ゼミナール-グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ-」.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). 後藤隆, 大出春江, 水野節夫訳 (1996): データ対話型理論の発見.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (2017). Awareness of dying. Routledge.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research*. Sage publications.

参考文献

- 高野陽太郎, 柳生崇志, & 李承玉 (2014). 「外国語副作用: 外国語の使用がもたらす思考力の一時的な低下」 JCSS Japanese Cognitive Science Society, 31-35.
- 広石英記 (2006). 「ワークショップの学び論: 社会構成主義から見た参加型学習の持つ意義」『教育方法学研究』, 31, 1-11.
- 渡辺良典, 池田真 & 和泉伸一 (2011). 『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』. 東京, 上智大学出版.
- Anderson, L.W., Krathwohl, D. R., Airasian, P.W., Cruikshank, K. A., Mayer, R. E., & Pintrich, P. R., Rath, J., & Wittrock, M. C. (2001). *A taxonomy for learning, teaching, and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives*.
- Cohen, E. G., & Lotan, R. A. (2014). *Designing Groupwork: Strategies for the Heterogeneous Classroom* Third Edition. Teachers College Press.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *Content and language integrated learning*.

Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Fadel, C. (2008) *21st Century Skills: How can you prepare students for the new global economy?* Global Lead Education Cisco System, Inc., Partnership for 21st Century Skills.

Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec., E.J. (1994). *The new circles of learning. Cooperation in the classroom.* Association for Supervision and Curriculum Development.

Lightbown, P., & Spada, N. (2006). *How languages are learned.* Oxford, UK: Oxford University Press.

Lyster, R. (2007). *Learning and teaching languages through content: A counterbalanced approach.* Amsterdam, The Netherlands: John Benjamins.

Pienemann, Manfred (1998). *Language Processing and Second Language Development: Processability Theory.* Amsterdam: John Benjamins.

【SV コメント】

田村 朋子（清泉女子大学）

事前にゴメスさんより発表レジュメ、分析シート、結果図、概念、カテゴリーの一覧を送っていただいた上で、スーパーヴァイズを開始しました。ゴメスさんは、概念が多くなりすぎていたことに悩まれてたので、分析テーマを設定から一緒に見直すことにしました。まず、プロセスのスタートとゴールを決めて、その中でどのようなプロセスを見たいのかを確認しました。そして、スタートを「分析対象者がこのプロジェクトを達成するためにどのように他メンバーと関係性を築いていこうかと思った瞬間」、ゴールを「対象者が課題を達成した瞬間」と定め、分析テーマを「英語を外国語として学習している英語上級レベルの日本人大学生が内容重視型グループプロジェクトにおいて他メンバーと関わり合いながら共同で課題を達成していくプロセスの研究」と設定し直しました。そして、設定した分析テーマを念頭に概念を見直しました。そのプロセスに必要な概念を検討し、もう一度データと生成した概念を見直し統合できる概念がないかを確認しました。

また、分析焦点者について、当初は、「大学の英語授業において内容重視型グループプロジェクトに取り組むことのある英語を外国語として学習している日本人大学生」と設定されていました。そこで、ゴメスさんに、この研究結果を実践的活用すること（どのような集団で適用できるか）を考えて、英語上級学習者なのか、もしくは、英語を外国語として学習しているあらゆるレベルの日本人大学生学習者にも当てはまるのかを考えていただきました。ゴメスさんは、学生同士の親密度がどのように影響して課題の達成につながるか、そのプロセスが見たいということで、英語上級学習者と初級学習者では学生の同士の授業中の関わり方が違ってくることを考え、分析焦点者を「英語上級学習者」と設定し直しました。

結果図については、当初は、2通りのプロセスがありました。学生同士の親密化がうまく課

題の達成に作用したプロセスと学生の親密化がうまくいかないまま課題の達成に至ったプロセスが結果図に示され、その2つのプロセスが、親密化を境に分断されていました。そこで、私の方から「課題の達成とはどういうことなのか」とゴメスさんに質問をしました。この授業の特性であるPBLがグループワークを重視しているということから、私のイメージでは、この授業における「課題の達成」とは、「この授業が目標としている、学生が協力をして課題を達成すること」だったのですが、ゴメスさんは、「課題の達成」とは、「学生が最終課題の10分の発表でグループの意見を提案できた」ことを想定していたことがわかりました。そうであれば、その課題の達成に向けたプロセスなので、学生同士の親密化がうまくいったかいなかったに関わらず、学生は課題の達成ができているのだからそのプロセスを分断しない方が良いのではないかとお伝えしました。

今回の発表では、授業中の学生同士の相互作用の方に主眼を置いてしまい、英語の学習が目的の授業ならではのプロセスにはなっていませんでした。フロアからも意見をいただきましたが、この授業が英語上級学習者の日本人大学生が受講する内容重視型の英語の授業であることを考えると、課題の達成には英語学習における目標も達成されなければならないはずです。そこを明確にすることで、英語の授業ならではのプロセスになっていくと思います。今後の課題としては、英語の授業ならではのプロセスを念頭おきながら、もう一度データや概念を見直して整理されると良いと思います。

【第2報告】

直原 康光（筑波大学大学院 人間総合科学研究科生涯発達科学専攻 博士後期課程1年）
JIKIHARA Yasumitsu : University of Tsukuba, Doctoral program in Lifespan Developmental Sciences

「面会交流に対する母親の受け止めの変化プロセス」

The Process of Changes in Mother's Cognition for Parenting Time

1. 研究の背景

厚生労働省（2017）によれば、我が国の2015年における未成年の子がいる離婚件数は、約13万件で、年間約23万人の子どもが離婚を経験している。我が国では、離婚時単独親権制度を採用していることに加え、別れて子どもと離れて暮らす親（別居親）親は、子どもに関わらない方がよい、離婚した夫婦が協力して子育てをするのは難しいという固定観念があり（小田切, 2009）、離婚後に別居親と子どもが面会交流（親の別居や離婚により、子どもと離れて暮らす親（別居親）と子どもが直接会ったり、電話や手紙等を通じてやりとりをする）は広く受け入れてこなかった。

しかし、2011年の民法改正等の影響もあり、面会交流は、一般的に、子の福祉を害する事情がない限り、実施することが望ましいとされようになった。最高裁判所（2017）によれ

ば、2015年の家庭裁判所における面会交流の新受件数は、年間14,241件（調停1万2,264件、審判1,977件）であり、これは10年前の2.46倍、5年前の1.59倍に増加している。別居親と子どもが交流する場合、特に年少児の場合、父母同士が連絡を取り合い、日程調整や受け渡しを行う必要があり、父母の協力が不可欠であるが、別居・離婚後の父母がこれらを行うことは困難な課題であるとされている（大塚、2015）。

我が国において、親が離婚した子どもから見た面会交流について、子どもの立場から小川（2018）が、別居親の立場から青木（2014）が、同居親の立場から小田切（2004）、本田（2013）がそれぞれ研究を行っている。本田（2013）は、離婚した子どもと同居する母親を対象にインタビュー調査を実施し、同居親が抱える困難さや面会交流を継続するための促進要因、阻害要因を検討しており意義深い。対象者が5名と少なく、離婚からの年数にも幅があり、面会交流を全く実施していない者2名を含むなど、多様な者が含まれている点が課題である。

米国等の研究において、面会交流やco-parenting（共同子育て）を促進又は阻害するいくつかの要因は明らかにされているが、離婚時に面会交流に後ろ向きであった同居親が、どのようなプロセスで元夫との協力関係を構築し、実施していくようになるのかについて詳細な検討が行われている研究は見当たらない。また、米国等では、共同親権制度が採用され、面会交流が実施されない場合に同居親の変更や罰則など強制的に履行を促す制度が存在すること、暴力等が存在する場合の面会交流の支援制度が充実していること、離婚等に関する意識や文化的背景が異なることから、米国等の知見が我が国の親子にそのままあてはまるのかは、慎重に検討する必要がある。

以上から、同居親が、面会交流に関して抱える困難さを乗り越える又は困難さがより深刻になるプロセスを明らかにすることや、前向きさや困難さを規定する一般的な傾向を量的に明らかにすることが、同居親とその子どもに必要な心理的支援を検討する上で重要である。そして、同居親等に対する支援を通じて、離婚が子どもに与える影響を最小限にすることに結びつくという社会的な意義を有すると考える。

2. 研究テーマと研究目的（意義）

研究者は、同居親が面会交流をどのように体験しているかについては、同居親個人だけでなく、別居親、子ども、その他のサポート源等との相互作用の問題として検討する必要があると考えた。面会交流に関して抱える困難さを乗り越える相互作用のプロセス又は困難さがより深刻になる相互作用のプロセスを明らかにすることで、同居親に対する理解が深まり、関与する専門家（司法関係者、第三者機関の支援者及び家族支援に関与するカウンセラー等）が、合意形成や介入等に関わる上での一助となることが期待できる。そして、離婚後子どもの親権者となるのは約8割が母親である（厚生労働省、2018）こと、相互作用は面会交流を継続して実施している場合に生じやすいと思われたことから、別居・離婚後子どもと同居して面会交流を継続して実施している母親を対象にすることとした。

以上から、本研究では、面会交流を継続して実施している母親が、面会交流に関して抱える困難さを乗り越える相互作用のプロセス又は困難さがより深刻になる相互作用のプロセスを明らかにし、支援の視点を得ることを目的とする。

3. M-GTAに適した研究であるか

(1) 他者との相互作用

面会交流では、同居親（母親）、別居親（父親）、子どもの三者間の相互作用が生じていると考えられる。具体的には、父母間（面会条件の調整等）、父子間（面会交流時の関わり）、母子間（面会交流前後の子どもの反応、母親の振る舞い）がある。

(2) 現象のプロセス性

別居後に面会交流について話し合い、最初に実施してみて、その後継続していくという流れで進む。その間に、別居・離婚という喪失体験からの回復、子どもの成長に伴う発達変化等、さまざまな変化が生じている。

4. 分析テーマへの絞り込み

インタビュー調査を行い共同研究者から定期的に助言を受けながら、その都度修正を加えた。最終的な分析テーマは、「面会交流を続ける中で、面会交流についての母親の受け止めはどのように変化していくのか」とした。検討過程は以下のとおりである。

(1) インタビュー調査開始前は、「別居・離婚後に子どもと同居する母親が、別居する父親と子どもとの面会交流の意義を見いだし、父親に安心して任せられるようになるまでの認知変容プロセス」と設定した。共同研究者から、意義を見い出せない、安心して任せられない母親もいると思われるので、もう少し広く設定してはどうかと助言を受けた。

(2) インタビュー調査を行う中で、当初比較的協力的な **Info** が多かったこともあり、「別居親との関係（あるいは面会交流自体）に困難を感じつつも、面会交流を通じて父母として協力していく（あるいは父母としての関係を再構築していく）プロセス」と修正した。

その後、父親との関係に葛藤を抱えた **Info** のインタビューを経て、父母の関係が協力的な群と葛藤的な群の 2 つに分析を分けることも検討した。また、類型論の考え方からどうしても抜けきれず、いくつかのパターン（安定して協力していた群、非協力であったが転換した群、非協力群）に分類しようとした時期もあった。しかし、助言を受ける中で、①父母の関係が協力的で比較的スムーズでも何らかの困難が存在しており、困難が存在するという点では共通していること、②面会交流自体や父親との関係で葛藤を抱えていたとしても、面会交流を開始するにあたり実施の適否や条件面で大きな対立があったケースは含まれず、基本的に面会交流は継続して実施されていることから、葛藤のレベルは中程度までの群と考えられること、③父親による母子に対する直接的な暴力は存在せず、子どもにとって面会交流が明らかに有害であるケースが含まれていないことから、2 つ以上に分析を分けることなく、1 つの分析にできると判断した。研究期間の制約等もあったことから、大幅な **Info** の

追加も困難であったことも理由として挙げられる。そこで、「面会交流を続ける中で、面会交流についての母親の受け止めはどのように変化していくのか」とした。分析テーマを考えるにあたっては、定義が必要となる語句の使用を避けるとともに、既存の枠組みによる判断や分類を避け、データに基づいた理論生成が可能になるよう、できる限り価値判断を挟まないような表現になるよう注意した。

5. インタビューガイド

先行研究を参考に、以下のインタビューガイドを作成した。基本属性、離婚等のいきさつ、養育費の受取状況に加え、以下の項目について尋ねた。

- (1) 面会交流の実施状況（実施の有無、形態（直接、電話メール等）、頻度、時間、方法、中断した場合はその事情等）について教えてください。
- (2) 面会交流を実施しようと思ったのはどのような経緯で、どのように取り決めましたか（実施するにあたり、どのように元配偶者と話し合いましたか）
- (3) 面会交流を実施する前に、面会交流について、どのように感じていましたか。
- (4) 面会交流を実施するなかで、お子さんの反応で印象に残っていること、そのときあなたが対応したことを教えてください。また、別居親と会うことでお子さんにはどんな変化があったと思いますか。
- (5) 面会交流を続けるため、あなた自身が心がけていること、あるいは役立っているサポートがあれば教えてください。
- (6) 面会交流を実施する中で困難を感じることはあればどのようなことか教えてください。
- (7) 面会交流を実施する中で、元配偶者にもっとこうしてほしいと思うことがありましたか。そのことについて、どのように対処しましたか。
- (8) 現在は面会交流についてどのように感じていますか。実施前と感じ方に変化があったとすれば、そのきっかけになったエピソードを教えてください。
- (9) 別居後、現在までを振り返って、あなたの元配偶者に対する気持ち（感情）や考え方は変化しましたか。変化した場合には、どのようなきっかけでどのように変化したかを教えてください。

6. データの収集法と範囲等

- (1) 募集方法、データ収集方法、倫理的配慮

研究協力者は、面会交流の支援機関の代表者又は裁判外紛争解決手続（ADR：家庭裁判所を利用せず柔軟な話し合いが可能な手続）機関の代表者等に募集文書を渡して、紹介を受ける等して募集した。また、研究者の知人にも依頼を行った。

当初の募集条件は、①離婚を経験して子どもと同居する母親、②離婚（別居）時に子どもが概ね小学校6年生以下であった（複数の子どもがいる場合は末子を基準とする）であった。

しかし、センシティブなテーマであり、研究協力の申し出は低調であった。そこで、離婚は

成立していないが現在別居中で面会交流を実施している者（1名）も対象に含めた。

2018年8月から2019年3月にかけて、プライバシーが確保できる個室等で、約60分間、半構造化面接によるインタビュー調査を行った。インタビュー内容は、許可を得てICレコーダーで録音し、逐語にして分析を行った。筑波大学東京地区倫理委員会の承認を得た上で、ネガティブな記憶に触れるため、無理に想起したり話したりすることで後に自身が苦しくなることもあり得る旨説明し、話せる範囲で話してくれれば十分であることを説明した。

(2) 研究協力者

研究協力者は、11名であった。インタビューを進めながら分析テーマ及び分析焦点者を検討した結果、面会交流を1度も実施していない1名を除外した10名を分析対象とした。基本属性等はTable1のとおりである。なお、Info.Hは、離婚が成立していないが、対象に含めた。理由としては、別居当初から面会交流を継続していること、離婚に向けた話を進めていること、他のInfoと比べ、本分析テーマに限れば大きな違いがなかったことが理由である。

また、子どもの年齢は、①別居時に概ね児童期⇒現在思春期（G, A, F, H, I, B）、②別居時に幼児期～児童期⇒現在も児童期（C, J, E, K）の2群に分かれる。母親が面会交流に期待することや子どもの反応は、子どもの年齢により若干異なることが考えられたため、2群としてそれぞれ協力者を追加で募ることも検討した。しかし、語りをチェックすると、バリエーションの違いはあるものの、概念レベルでは大きく異ならないと考えられたため、今回の分析では、①、②のいずれも対象として子どもが児童期（幼児期）から思春期に至るまでのプロセスを捉えることとした。

Table1 研究協力者の属性等

Info	別居からの年数	離婚からの年数	Infoの年代	子どもの年齢、性別		離婚形態	養育費	Time (min)
				別居時	現在			
G	8年	(離婚先行)	50代	小5女, 小4女	高3女, 高2女	協議	×	63
A	7年	6年	40代	小4男, 3歳女	高2男, 小5女	協議	○	82
F	4年	4年	40代	小4男	中2男	調停	○	53
H	4年	離婚前別居中	50代	中1女	高2女	—	○	76
I	4年	4年	40代	小3男, 小1男	中1男, 小5男	協議	○	74
B	3年	3年	30代	小5男	中2男	協議	○	66
C	2年4か月	1年4か月	40代	小2女	小5女	協議	×	60
J	1年6か月	10か月	40代	5歳男, 3歳女	6歳男, 4歳女	調停	○	54
E	10か月	10か月	30代	6歳男	小1男	協議	○	57
K	1年3か月	6か月	40代	4歳女, 1歳女	5歳女, 2歳女	ADR	○	60
M								64.5

7. 分析焦点者の設定

子どもと同居して面会交流を続けている母親

8. 分析ワークシート例（回収資料は省略）

語りが豊富であったInfo.Fから分析を開始することとし、逐語に目を通し、分析テーマと

分析焦点者に関して、意味のありそうな箇所に着目し、分析ワークシートのバリエーション欄に転記し、定義と概念名を記入した。そして、別の Info にも定義に当てはまる語がなにかを探し、さらにバリエーション欄に転記していった。その過程で、定義が狭すぎてバリエーションが増えない概念も散見されたため、適宜定義を見直しながら作業を進めた。

今回の発表にあたっての SV では、「理論的メモ欄には、バリエーションそれぞれの意味を解釈して記載する必要がある。」との助言を受け、解釈のプロセスを省略あるいは頭の中で済ませていたことを反省した。今回の発表には間に合わなかったが、再度解釈を行い、分析全体を見直したいと考えた。

9. カテゴリー生成（回収資料は省略） <概念> 【サブカテゴリー】「カテゴリー」
概念を比較しながら、カテゴリー「父親の子どもへの良い影響期待と失望の揺れ」をどのように生成したのかを記述する。

当初、面会交流に対するポジティブな認知として、<父親とではできない体験><父親の存在を感じてほしい・アイデンティティーになってほしい><決めた交流プラス α もしてあげたい><別居しても父母の機能は同じ、と感じる>を 1 つのまとまりとして【子どものためになることを実感・主体的関与】にまとめ、これと並ぶものとして<面会中に自分の時間ができるのは嬉しい><養育費への期待>を【ポジティブ思考・養育費への期待】とした。また、これらと対立するものとして、<父親がおいしいところだけ持って行くという不満>を【父への嫉妬】とした。そして、【子のために面会交流は維持しなければ】、【面会交流は実施したくないという本音】等とあわせて、「面会交流を巡るゆれと安定」というカテゴリーにまとめた。

しかし、カテゴリーがやや広すぎるように感じたため、カテゴリーをカテゴリーグループに引き上げた上で、再度サブカテゴリーを見直し、<決めた交流プラス α もしてあげたい>を新たな概念である<子への促し><子どもに関する情報提供を父にしてあげたい>とともに、【面会交流に対する主体的関与】にまとめた。また、<子どもの様子を見ながら面会交流を調整する>を【子どもにとって面会交流が良いのか立ち止まる】とした。

最終的に、【子どものためになることを実感】【ポジティブ思考・養育費への期待】【面会交流に対する主体的関与】というポジティブな認知と【父への嫉妬】【子どもにとって面会交流が良いのか立ち止まる】というネガティブ認知の間を行きつ戻りつしているとまとめ、これらを「父親の子どもへの良い影響期待と失望の揺れ」というカテゴリーとした。

今回の発表にあたっての SV では、「概念から 4 段階に渡って抽象度を上げる必要があったかについて考えると、概念を作りすぎたからではないか。」との助言を受けた。当初、数年以上の長期に渡るプロセスであったため、概念が増えるのはやむを得ないとも考えていたが、改めて見返してみると、サブカテゴリーレベルでまとめることができる概念も散見されたことから、安易に概念を生成しすぎていたと反省した。今後は、再度概念を見直したいと考えた。

10. 結果図とストーリーライン（いずれも回収資料のため省略）

ワークシート作成時に、考えたり修正したことを思考過程があとからわかるように書くよう心掛けた（例 資料1の理論的メモ欄）。さらに、別に分析全体について考えたことや思いついたことを、できる限り自由に理論的メモ・ノートに書くようにした。

11. 分析を振り返って

- ・M-GTAでの分析は初めてであったため、共同研究者の助言を受けながら進めたが、意味解釈が不十分であった点などを振り返ると、なぜそのような方法をとるのかを十分理解できていなかったことに気付いた。再度分析をやり直したいと考えた。

- ・分析過程を振り返ると、KJ法を参考にした分類や、時系列に沿った整理という思考になりがちであることも分かった。

- ・1枚の結果図でプロセスを図示することの難しさを感じた。現場で活用してもらえよう、もう少しシンプルな形にブラッシュアップしていきたい。

12. 会場でのコメント要旨

<分析テーマについて>

- ・現象のプロセスにスタートとゴールがあるとすれば、それぞれどのような状態か。研究目的に記載されている内容の方が、分析テーマに近いのではないか。

- ・どのような場合にも面会交流が子の利益になるか疑問であり、それを踏まえると、どんな時に面会交流を継続することを「決断」していくのか。それを決めていくプロセスではないか。

- ・分析テーマは、明らかにしたい何か（結論に向かう方向性）が見えたとき、その方向で修正していったほしい。今の分析テーマだと、どんな方向性でもOKとなってしまう。

- ・「面会交流」は、制度上の言葉であるが、もしこの言葉を使わずに分析テーマを考えるとどうなるだろうか。データの一番ディテールな部分を踏まえて概念化することがオリジナルな知見に繋がるのではないかと思う。

<概念生成等について>

- ・概念数が多いのは、データに密着しすぎているからではないか。

- ・面会交流を継続する上で、コアとなりそうな概念は何か。

- ・概念からサブカテゴリーでまとめる際に、データから離れてしまっているように感じる。

類似したものを集めて抽象化しないようにしてほしい。

<その他分析に関するコメント等>

- ・相互作用の相手に支援者（専門家）はどの程度入っているのか。

- ・概念等では、元夫のことを「父」と記載を統一しているのは意図があるのか。分析焦点者がどのように語っているかが重要であるため、再度見直して見てほしい。

・過去の元夫に対する感情がフラッシュバックしてくることもあると思うが、それをどうやって克服して、面会交流が子どもの利益になると確信に至ったのか、そのプロセスを見るのが M-GTA である。安心をしたのであれば、どのような様子を見て、どのような実感があったのかを丁寧にみてほしい。母親の心理を理解できるようまとめていくことで、支援者等にとっても役に立つと思う。

・時系列のまとめがよくないのは、他の場合に同じ順序、段階で当てはまるか分からないからである。時系列でない方が、応用しやすい。

<サブカテゴリーについて（木下康仁先生）>

M-GTA は、概念とカテゴリーでまとめていくので、サブカテゴリーについては必須ではない。ただ、概念をカテゴリーにまとめる際に、一定のまとまりが出来た方が分かりやすい場合に作ってもよいものと考えてほしい。中二階のイメージである。

1 3. 発表を終えての感想

この度は、貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

SV の長山豊先生からは、バリエーションとして抽出した語りの意味を一つ一つ解釈し、分析ワークシートにきちんと残すことの必要性を教えてくださいました。フロアーの先生方からのコメントにもありましたが、分析焦点者である母親にとってどのような意味があったのか、どのような判断をしたのかということを理解する上で、きちんと意味を解釈していくことの重要性が理解できました。もう一度データに戻って考えたいと思います。また、データに密着しすぎて概念を作りすぎており、そのためサブカテゴリー、カテゴリー、カテゴリーグループと、意味を抽象化した上位概念を作らざるを得なくなっているのではないかとご助言いただきました。概念を見直してみると、概念が具体的すぎる一方で、概念にフィットしていないカテゴリーもあり、やはり、概念を簡単に作りすぎていたことが原因であると気付きました。さらに、分析テーマの設定は研究開始当初からの悩みではありましたが、長山豊先生、フロアーの先生方からのご助言を受け、少しずつクリアになってきた気がします。

最後に、丁寧なご指導をいただきました長山豊先生、ご助言をいただいた先生方に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

方法論及び研究例として参考にした文献

木下康仁. (1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ：質的実証研究の再生. 東京：弘文堂

木下康仁. (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い. 東京：弘文堂

木下康仁. (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 東京：弘文堂

小川洋子. (2018). 子どもが面会交流を通じて別居親と新たな関係性を築くまでのプロセスに関する質的研究. 家族心理学研究, 32, 14-28.

小倉啓子. (2005). 特別養護老人ホーム入居者のホーム生活に対する不安・不満の拡大化プロセス. 質的心理学研究, 4, 75-92.

佐川佳南枝. (2001). 分裂病患者の薬に対する主体性獲得に関する研究. 作業療法, 20, 344-351.

竹下 浩・奥秋清次・中村瑞穂・山口裕幸. (2016). ものづくり型 PBL におけるチームワーク形成過程. 教育心理学研究, 64, 423-436.

引用文献

青木 聡. (2014). 面会交流と曖昧な喪失：別居親の悲嘆に関するアンケート調査結果. 大正大学研究紀要. 99, 248-230.

本田麻希子. (2013). 離婚した親が経験する子どもの面会交流のプロセス：同居親が感じる意義と困難に着目して. 東京大学大学院総合教育科学専攻(未刊行). 東京：東京大学.

厚生労働省. (2017). 平成 29 年我が国の人口動態-平成 27 年までの動向.

<<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/81-1a2.pdf>> (2017 年 8 月 14 日)

小田切 紀子. (2004). 離婚した母親の家庭状況の類型から見た心理的適応. 心理臨床学研究, 21, 621-629.

小田切 紀子. (2009). 子どもから見た面会交流：離婚家庭の子ども達の声. 自由と正義, 60(12), 28-34.

大塚正之. (2015). 家事紛争解決プログラムの意義：面会交流原則論とは何か. 梶村太一・長谷川京子(編). 子ども中心の面会交流 (pp.260-279). 東京：日本加除出版.

最高裁判所. (2017). 平成 27 年度司法統計年報家事事件編-9 家事審判・調停事件の事件別新受件数 家庭裁判所別. <<http://www.courts.go.jp/app/files/toukei/703/008703.pdf>>

付記

本研究は、公益財団法人明治安田こころの健康財団の研究助成を受けて実施された。

【SV コメント】

長山 豊（金沢医科大学）

直原さんから研究結果について繰り返し説明を受けて、同居親である母親は別居親との面会交流について非常に複雑な感情を面会交流に抱いていることを強く感じました。直原さんは、現場で両親の様々な感情や考えに挟まれながら、面会交流の意義を両親に理解してもらえよう尽力されていたのだと思います。直原さんは、1つのモデルとして面会交流を継続している母親の認識や行動を明らかにしようとしたことは、面会交流に不安や迷いを抱えている母親の支援につながる価値のある研究だと考えます。

事前のSVの中でもやり取りをさせていただきましたが、研究テーマおよび研究目的について

焦点を絞ることが重要だと考えます。発表当日の研究テーマと研究目的の記述内容の表現がばらついていました。レジュメの研究テーマには「面会交流に対する母親の受け止め方の変化のプロセス」と標榜しており、母親の面会交流に対する「認知」に焦点を置いています。その一方で、研究目的は「面会交流に関して抱える困難さを乗り越えるプロセス」と「困難さがより深刻になる相互作用のプロセス」という、真逆のプロセスを提示しています。母親が面会交流について夫や支援者とどのように「対話」し「行動」に起こしているのか、という面会交流の実施にまつわる分析焦点者の「行動」に焦点を置いています。直原さんは豊富な現場経験があるからこそ、この研究で何を明らかにしたいのかという関心の範囲が幅広く広がっているような印象を受けます。ですが、研究を読む側にとっては、かえって研究テーマや研究目的の設定が分かりにくく感じてしまいます。「母親の受け止め方」という「認知」にのみ焦点を当てると、受け止め方は千差万別であり、多様な面会交流への認知のパターンが包括され、さらに「変化」が加わると非常に複雑な結果が描かれることが予想されます。データの範囲が限定されないため、理論的飽和に至ることが困難になります。M-GTAを研究手法として用いる上で、最も重要なステップは研究目的を明確に説明することです。研究目的が明確化されることで、分析焦点者・分析テーマの設定範囲がクリアになります。直原さんの結果図を踏まえると、母親が面会交流を継続しているのはなぜなのか、面会交流を継続している背景にどのような相互作用が展開されているか、という点に研究の焦点は絞られるのではないのでしょうか。

そして、分析テーマの設定においては、母親・別居親・子どもにとって「面会交流」を巡ってどのような相互作用が展開され、その相互作用がどのように変化しているのかに着目すべきだと考えます。「面会交流」における3者間での相互作用の意味合いがどのように変化しているのか、得られたデータから説明可能な範囲を見出していきます。離婚によって家族としては破綻した関係性から始まり、母親が子どもの成長を中心に見据えながら別居親との間で新しい関係性を築いています。

分析テーマを検討するために、直原さんが作成した結果図全体を改めて眺めてみると、別居親とは関わらせたくないという母親の拒否感や嫌悪感は時系列に関係なく存在しています。直原さんの分析の思考として、継続的比較分析による類似例と対極例の検討は活かされており、ほとんどの概念において、母親の別居親に対するアンビバレンツな感情や認識が抽出されています。母親は、別居親と子どもの交流について腑に落ちない側面を常に抱えながらも、子どもが別居親と交流する機会を剥奪しないよう配慮する様子が見受けられます。別居親が子どもにとって否定的な影響を及ぼす様子が強ければ、母親は子どものために面会交流を中止する方向へと動く概念もみられていました。現在の分析結果を俯瞰して、再度分析テーマを考えると、別居親の存在が子どもにとって、どのような影響や価値があるのかを常に見定めながら面会交流を継続させているプロセスが浮かび上がってきます。面会交流を継続しているという状態は一見、相互作用が安定しているようにみえても、別居親の行動次第によって母親が面会交流の意味づけ・価値づけを大きく転換する可能性を秘めており、非

常に動的で不安定なプロセスとも言えます。

分析テーマは、最初からぴったりとフィットする内容が見つかる訳ではなく、grounded on data による分析を進めていく過程において、変化のプロセスの範囲を掴み取り、よりデータに即した解釈へと修正することができます。そして、現象の変化の背景に何が影響しているのか掴み取るためには、分析ワークシートの理論的メモ欄に自分の解釈を丁寧に記述することを積み上げていくことに尽きると、私は思います。大変な解釈の作業だと思いますが、1つ1つの概念の意味を丁寧に検討することが大切です。今後、直原さんが再分析をなさっていく過程において母親の面会交流に伴う相互作用が浮き彫りになり、同居親が面会交流に向き合う上での貴重な判断材料となっていくことを願っています。

【第3報告】

岸田泰則（法政大学大学院）

Yasunori Kishida : Hosei Graduate School

大企業に勤務する定年再雇用者のジョブ・クラフティング行動に関する研究

Study on Aging Workers' Job Crafting of the big company

1. 発表の目的と位置付け

『日本労働研究雑誌』No.703に「高齢雇用者のジョブ・クラフティング行動の探索的検討」（岸田,2019）を1月に掲載していただいた。この論文では、X社に勤務する高齢雇用者（役職定年者、定年再雇用者）11人を対象に「定年後の高齢雇用者が就業を継続していく過程において、現役世代との関係性や仕事の意味の認知、そして職務範囲はどのように変容していくのか」を探索的に分析した。本研究では、対象を数社に広げ、対象者は役職定年者を範囲外とし、再雇用者のみを対象にした。定年を契機に、再雇用者が仕事の範囲や意味づけ、対人関係をどのように変化させるのかのプロセスを分析する。本調査では、インタビュー対象を再雇用者のみならず、再雇用者の上司へもインタビューしているが、上司を分析焦点者とした研究は次期の研究とし、本研究では再雇用者を分析焦点者として分析する。本分析を博士論文に中核に位置付ける。

2. 研究の背景

2.1 高齢雇用者の活性化の課題

高齢者雇用安定法による高齢者雇用確保措置の強化により高齢者の就業率は上昇し（Kondo and Shigeoka,2017）、労働力人口に占める高齢者の比率は上昇してきた（平成29年版高齢社会白書）。一方、経済の生産性の向上の面から、高齢雇用者の能力の向上が課題となっている（太田,2018）。そして個人の生きがいの観点からも、比率が増える高齢者雇用の活性化が求められるが、現状は「福祉型雇用」と言われ、特に大企業では、中小企業に比

べ高齢雇用者が活性化している状況から程遠い（今野,2014;2017）。そして、定年再雇用や役職定年という苦しいキャリア転換をどう乗り越えるのかが課題となっている。近年、高齢者雇用の活性化の研究では、ジョブ・クラフティングが注目されつつあるが（大木 2015）、高齢雇用者のジョブ・クラフティング行動を解明した研究は極めて少ない。ちなみに、ジョブ・クラフティングは、「雇用者が仕事や仕事上の対人関係の境界において行う物理的・認知的変化」と定義され、職務範囲や内容の変更であるタスククラフティング、仕事の意義の変更である認知的クラフティング、人間関係の境界の変更である関係的クラフティングの3次元で構成される（Wrzesniewski & Dutton,2001）。

2.2 高齢雇用者のジョブ・クラフティング

近年、ジョブ・クラフティングが高齢雇用者に生きがいを与えることも示唆されている（Kooji,Tims,and Kanfer 2015）。そして、森永（2010）は、ジョブ・クラフティングの要因として、従業員が困難な状況や不満を感じる状況をあげており、定年を迎え再雇用者になった高齢雇用者も困難な状況や不満を感じる状況にあると推察されるので、高齢雇用者はジョブ・クラフティングを起こしやすいと言える。

また、今までのジョブ・クラフティングの先行研究では、暗黙のうちに拡大的なものに限って議論していたが、中野（2015）は「仕事の境界を縮小させる」縮小的ジョブ・クラフティングを提起した。縮小的ジョブ・クラフティングにおいても、「余計なタスクを行わず最低限のことしか行わない縮小的タスククラフティング、人とのかかわりを避ける縮小的関係的クラフティング、自分の仕事の定義を狭める縮小的認知的クラフティング」の3次元を想定されている（中野,2015）。岸田（2019）においては、高齢雇用者の活性化に、縮小的ジョブ・クラフティングが有効なケースがあることを示唆しており、組織目標に融合的な拡大的ジョブ・クラフティングだけでなく、縮小的ジョブ・クラフティングの視点も必要となる。

しかし、中野（2015）は縮小的ジョブ・クラフティングを明確に定義していない。そもそも拡張的という観念は組織側の発想として捉えられる。一方、ジョブ・クラフティングが個人起点の概念であるのに、なぜ、組織側の発想である拡張的、あるいは縮小的な考えが入り込んでいるのか。このことは、組織の雇用者としての個人が、雇用を継続する中で組織側の発想が埋め込まれたものとして説明できる。ここまでの論点を踏まえ、本研究では、縮小的ジョブ・クラフティングを「雇用者が、仕事や仕事上の対人関係の境界において、量的あるいは質的に縮小傾向に行う物理的・認知的変化」と操作的に定義する。縮小的ジョブ・クラフティングの下位の3次元についても、次のとおり操作的に定義する。縮小的タスククラフティングを、「雇用者が自発的に仕事の量や範囲を減少傾向に調整すること」とし、縮小的関係的クラフティングを「雇用者が仕事上の対人関係の範囲や量を狭めること」とし、縮小的認知的クラフティングを「雇用者が、ライフキャリアの中で仕事の価値プライオリティをより低く位置付けること」と操作的に定義する。縮小的タスククラフティングは縮小的を量的に捉えた概念であり、縮小的関係的クラフティングは縮小的を量的に捉えた概念で

あり、縮小的認知的クラフティングは縮小的を質的に捉えた概念となる。縮小的ジョブ・クラフティングの下位の3次元について、量的側面と質的側面を表1に表す。

表1 縮小的ジョブ・クラフティングの3次元の定義

	量的側面	質的側面
縮小的タスククラフティング	仕事の量や範囲を減少傾向に調整すること	－
縮小的関係的クラフティング	仕事上の対人関係の範囲・量を狭める	
縮小的認知的クラフティング	－	仕事の意味づけを自己の中でのプライオリティを低く位置付ける

3. 研究の目的

日本における高齢雇用者のジョブ・クラフティング行動は、ほとんど明らかにされていない。そのため、本研究の研究テーマは、「高齢雇用者が職場の中でジョブ・クラフティングを起こし、その行動が変容するプロセス」とする。そして、高齢雇用者の活性化の課題は、中小企業よりも大企業で深刻であるため、本研究では大企業における高齢雇用者のジョブ・クラフティングに焦点をあてる。ジョブ・クラフティング行動は、個人と職場の社会的相互作用により変化するものであるため、本稿では相互作用によるプロセス解明に特徴をもつ M-GTA による分析手法に基づいて、大企業に勤務する定年再雇用者のジョブ・クラフティング行動の変化のプロセスを明らかにすることを目的とする。また、先行研究では、高齢雇用者の活性化にジョブ・クラフティングが有効であると示唆するが、高齢雇用者がジョブ・クラフティングを起こす要因やアウトカムについては明らかにされていないため、それらを明らかにするためには、帰納的研究手法であり領域密着理論生成の研究デザインである M-GTA が適していると判断した。M-GTA を活用することにより、実践での活用にも適した研究となることも期待できる。

4. 方法

4.1 調査方法

本稿の調査は、人事研修サービスの A 社を通じて、大企業 5 社の人事部が「職場の中で役割創造している再雇用者」として人選した再雇用者 9 名へ、2019 年 2～5 月にかけてインタビューを実施したものである。なお、「役割創造」については、「自らのキャリア資産を認知し、自らが置かれた組織環境を客観的に理解することでキャリアを再構築して、組織における主観的ポジションを創造すること」と操作的に定義した。インタビューは、1 人ずつ所属企業の会議室で約 90 分間実施した。インタビューアーは、2 名か 1 名であり、著者の他、法政大学の大学院生 2 名が担当した。面接にあたっては、「インタビュー概要書」を事

前に送付し、面接の開始時点でインタビューの目的、聞き取り内容の取り扱い、秘密保持について説明し、同意書にインタビューイの署名を得た。面接は、インタビューガイドに基づき、半構造化面接を行った。調査内容は、許可を得た上で IC レコーダーに録音し、後日逐語録として文章化した。インタビュー対象者を表 2 に示す。

表 2 インタビュー対象者

	氏名	年齢	性別	所属企業	職 種	ラインマ ネー ジャー経 験	定年後の職場
1	USさん	63歳	男性	医療機器メーカー	人材育成	あり	定年前と別の職場
2	ODさん	63歳	男性	医療機器メーカー	人材育成	あり	定年前と別の職場
3	HRさん	61歳	男性	放送会社	管理	あり	定年前と別の職場
4	MSさん	62歳	男性	放送会社	セールスエンジニア	あり	定年前と別の職場
5	TSさん	61歳	女性	放送会社	管理	なし	定年前と同じ職場
6	TRさん	62歳	男性	医療機器メーカー	品質管理	あり	定年前と別の職場
7	KNさん	62歳	男性	生命保険	人材育成	あり	定年前と同じ職場
8	GKさん	62歳	男性	鉱山	人材育成	あり	定年前と別の職場
9	FMさん	61歳	男性	情報システム	システムエンジニア	あり	定年前と別の職場

インタビューガイドは岸田（2019）でのインタビューガイドを基に、本研究の分析テーマに照らして改訂し、さらに法政大学の大学院生 2 名との打ち合わせに基づき、次の通り作成した。

- ①現在の仕事と過去の仕事内容
- ②定年を契機にした仕事に対する気持ちや仕事の内容、対人関係の変化
- ③上司からの役割提示や期待感の表明の有無
- ④上司からの評価や周囲からの認知の状況
- ⑤上司や同僚とのコミュニケーションの状況
- ⑥自己のスキルと仕事との関係
- ⑦職場の中での居場所感の有無
- ⑧今後の働き方に対する思い
- ⑨職場の組織文化

4.2 分析方法

本稿の分析は、領域密着理論の生成に適した質的分析手法である M-GTA を採用し、木下（2007）に示されている手順に基づき、分析した。分析テーマを「大企業に勤務する定年再雇用者が定年という転機を乗り越えて、自らの新しい役割を見出していくプロセス」と設定した。分析焦点者を「大企業に勤務する定年再雇用者で、定年後に地位や役割の変化を経験しながらも就業を継続する人」と、現象特性は、「定年を契機に現役という主役の座を降ろされた再雇用者が、脇役としての役割との心理的距離を縮めていく動き」と設定した。

まずは、逐語録から分析テーマに照らし着目すべきデータを探索し、その後、分析ワークシートを作成して概念を生成した。表 3 に分析ワークシートの例を示す。その後、理論的サ

ンプリングに基づき、複数の概念を生成し、継続比較分析により複数の概念間の関係性を分析し、カテゴリーを生成した。

表 3 分析ワークシートの例 (回収資料)

5. 結果

5.1 概念とカテゴリー

逐語録のデータから、18 概念、6 カテゴリーが生成された (表 4)。

表 4 概念・カテゴリー表 (回収資料)

5.2 結果図とストーリーライン (回収資料)

定年というイベント、すなわち時間軸で強制的に「現役という主役の座の喪失」を味わった再雇用者は、周囲より“定年し、退職金をもらった終わった人”との暗黙の評価を受ける。同時に、60 歳以降、“そこまでやらなくてもいいよ”といった空気感に包まれ、「ロスタイムに置かれた戸惑い」を感じる。これらのように定年直後において、再雇用者は否応なく【脇役としての認知】をしている。これは周りからの具体的な発言があるわけではなく、再雇用者が現役世代の頃のように振る舞うことを止める空気感である。ただし、そのような境遇にながらも本稿で分析した再雇用者は徐々に【現役世代との心理的距離を保持】することで、「側面サポートとしての役割の認知」や「シニアに棲み分けられた主役パートの発見」といった【新たな役割創造】につなげていく。この変化には、「職務内容の変更を許容される認知」や「自己の能力に対する自信」といった【高い仕事能力】が影響していた。【新たな役割創造】をした再雇用者は、【仕事量の縮小的調整】や【対人関係の縮小的調整】の行動によって、【去りゆく思いを抱えながらの居場所感の認知】に至る。

6. 考察

本稿での分析の結果、大企業の再雇用者は、定年により、現役正社員という主役の座を失い、キャリアの喪失といった転機を迎え、さらには、役割提示があいまいなままに置かれ、残り 5 年というロスタイムに入る境遇を味わうことになる。そのような中でも本稿で分析した役割創造をしている再雇用者は、現役世代との心理的距離を微妙に保持しながら、また、その高い仕事能力により、自らの新たな役割を創造していた。新たな知見としては、2 点ある。第 1 に、仕事量の縮小的調整といった縮小的タスククラフティングが、ペイメントや脇役といった境遇に対する代償として機能することで再雇用者の気持ちの切り替えを促し、再雇用者のモチベーションが極端に下がることを防いでいた。第 2 に、対人関係の縮小的調整といった縮小的関係的クラフティングには、現役時代と比べ、より居心地のいい場（ネットワーク）に身を置きたいという防衛反応の機能があったと言える。

7. 分析を振り返って

実は、本調査では、再雇用者（60～64 歳）だけでなく、役職定年者（55～59 歳）もインタ

ビューしており、さらには、再雇用者や役職定年者の上司へもインタビューしていた。再雇用者や役職定年者のデータだけでなく、上司のデータも含めて分析しようとしていた。分析焦点者を検討する中で、上司を含めては別の分析になると気づき、シニアだけの分析とした。そこで、再雇用者に役職定年者を加えた分析を開始したが、再雇用者と役職定年者では、職場で置かれている環境が相違していることに気づき、分析対象を再雇用者に限定した。再雇用者は、定年を迎えており、退職金を受けており、さらには給与が現役の半分程度ということになり、本人も周囲も「終わった人」というイメージを持っているケースもあったためである。実際、役職定年者は正規雇用であるが、再雇用者は、非正規雇用であり、一緒に分析するのは乱暴であった。

また、現時点では、再雇用者も 60～61 歳と 62～64 歳では、リタイアまでの期間の長短の差や、定年になってからの時間の長短で思いが異なることに気づきつつあり、研究の限界として、再雇用者も 60～61 歳と 62～64 歳で分けて分析すべきであったかもしれない。

8. 方法論の参考文献

利用者の言動にイライラしても、不適切な介護はせずに業務をしている介護老人福祉施設の介護職員下康仁（2007）『ライブ講義 M-GTA-実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂.

9. 会場からのコメント概要

SV 林葉子先生からのコメント

最初の概念である「現役という主役の座の喪失」では、最初の概念なのに、理論的メモ欄に、「最初から乗り越えて」と書いてあり、概念の中にプロセスが含まれている。

「恵まれた思い」という概念については、なぜ恵まれているのか、お聞きになりましたか？

そういうところを分析 WS や論文に織り込むともっとイキイキとした分析となる

後藤喜広先生のコメント

男の鎧を脱いだ結果、仕事から少し離れて、負担が楽になったというような感想はなかったのか

SV 林葉子先生のコメント

仕事にロスタイムとっているあたりから、仕事にしがみついている

仕事から離れられない人たちのあり方、それが分析焦点者になる

男性対象者がどのように気持ちを切り替えたらいいのかを支援したほうがいい

大橋重子先生のコメント

前提としてネガティブなところがある。結論がかわいそう

でも、生成された概念をみてみると、他の心理的な距離はまだ離れていない。会社に寄り添っていて、あと数年をカウントダウンしているだけではなく、立場は変わったが、組織との

関係を新たな形で維持しつつ、楽しみを見つけているところも隠れているのではないのではないか。そのような面も示したほうがいい。

SV 林葉子先生のコメント

初心者にありがちな既存の理論に引っ張られている傾向がある。データ的にはいいものもあった。概念にもいいものもあった。であるから、もう少しプラス志向でやっていかないと。行政からこういう実践的な研究を委託されるのには、高齢者にとって給料が下がるのに、働く意味を見つけてあげて、職場でも盛り上げていきたいとい意図があるのではないでしょう。もし、行政とか政策とか考えるのであれば、そうやって自分のもっている理論にとらわれず、データオンでやってください。分析テーマで「定年を転機」としているが、定年を転機と考える。大抵の方は、最後の有終の美を飾りながら、自分の生活設計を他で見つけているかもしれない。仕事に執着して最後までやりたい人を相手にするのであって何かい提案をできるように、分析テーマをよく検討したほうがいい。

橋本先生のコメント

「現役社員の主役の座の喪失」という概念の中にも、すでにプロセスが入っているとおもった。否応なく自己を納得させようとしている語りは何か？

男女差を感じるところはなかったのか？

山崎浩司先生のコメント

「仕事中心のライフキャリアからの脱却」という概念に対し、本人はポジティブに捉えているのか？ネガティブに捉えているのか？

仕事が減ったかもしれないけど、ワークでなくライフの比重が多くなって、現役にいいだろうという思いもあるかと思ったけど、そうではないとなると、仕事にしがみついている人を対象にしていることになる。

インタビュー対象者の属性の中にラインマネージャー経験をなぜ聞いたのか？

データの対象範囲をラインマネージャーの地位までいった人にすべきではないか。分析焦点者はラインマネージャーに一旦ついた人になるのではないか

佐川佳南枝先生のコメント

時系列で捉えるのは、よくない。結果図を見ると、全てが縮小の傾向へ一直線でいくとなっているが、そうとは限らない。時系列で縮小の傾向へ行くとは限らない。ポジティブな調整と縮小傾向は対極な関係にある。全てが縮小の傾向へ一直線でいくという理論モデルは危ない。「恵まれている思い」の概念の語りの中でも創造的なスキルを活かすところや環境を変えてみる感じもある。環境との様々な調整もしていると思うけど、もっと工夫されているところを見逃されているのではないか。ネガティブな方向ばかり照らされているようでもったいない。もう少し見ていくと、新たな発見があると思う。

唐田順子先生のコメント

分析テーマは「自ら新たな役割創造のプロセス」としていながら、結果図の最後が「去りゆく～」ではあっていない。「去りゆく～」は結果図の真ん中に出てくるものではないかと思

う。やはりポジティブなもののかかわりながら、新たな役割創造に行くのではないでしょう
か。「恵まれているという思い」がシニアの人が周囲の人と比べて恵まれているとおっしゃ
っていたが、どこにも横を見ているという語りはない。インタビューした印象に引っ張られ
ている。「主役の座の喪失」の語りをみても、「主役の座の喪失」になるのかわからない。「も
どかしい」、「満足してない」「しょうがない」という語りが「主役の座の喪失」になるのか。
概念名は先に定義をつけて、定義から概念をつけていく。他の語りから概念を探していく時
は、定義と照らし合らし、その定義に合うのかということで、他の語りをその概念のヴァリ
エーションに追加していく。概念名の印象でデータを見ていて、自分がインタビューで受け
た印象でなんとなくニュアンスでやっているのではないか。というのも、ストーリーライン
の記載の中に概念やカテゴリー以外の余計な記述がある。ストーリーラインは、概念やカテ
ゴリーで説明するものであって、それ以外の余計な記述を入れてはいけない。概念生成の過
程において、ヴァリエーションと概念名、定義名がぴったりあっていないといけない。語り
はおもしろいのがいろいろあって、再編成されれば、すごく良いのができてくるのではない
か。概念名とカテゴリー名と定義の横並びの対比表が出されているが、カテゴリーは、概念
と概念の動きが現れて初めてカテゴリーになる。こうやって、横並びの対比表にされても、
動きがわからないので、説明しようがない。概念や全部できたら、結果図として説明された
方が概念と概念の関係があって、そこからその関係性の中でカテゴリーになるのだという
ことがわかる。このような対比表は、類似性を纏めてこうしましたと間違えかねられない。
概念を作っていく時からカテゴリーに上がる何があるかを考える。木下康仁先生の本での 4
つのレベルで検討していく。概念と概念の横並びの関係、関連付けられた概念と概念と
その他の概念との関係、概念は明らかにするプロセスの何かにつながっていないか、概念がど
のカテゴリーにつながっていくのだろうかといった、そういう 4 つのレベルと思考が働いて
いたかを考えること。

マクドナルド先生のコメント

全体の印象はグランデッドセオリーで分析していない。他の方法で分析している。インダク
ティブでない。理論があって、理論にあったようにデータを見ている印象だ。リサーチクエ
スションをどう考えたのか。ジョブ・クラフティングとこの論文は関係ないのではないか。
どういうことをやって、こういうことが起こったことに視点をあてないとインダクティブ
でやったとは言えない。

奥田孝之先生のコメント

定年後、職場を変わっている人が多いので、組織社会化の過程があるのではないか

木下康仁先生のコメント

全体をきいていると、大企業という前提をつけるとしても、定年再雇用者になっていくプロ
セス、ということだと思う。定年再雇用者は時間的にも限度があり、組織的な位置づけでも
不安定で、誰も外側からも定義してくれない。自分でそこを埋めていかないといけない。い
ろいろなポジティブなものから、ネガティブなものまでさまざまな再調整をしないといけ

ない。役割もあれば価値観も入ってくるし、宙ぶらりんなキャリア段階、人生段階にいる人々だとすれば、こういう状況に置かれたら、誰だって、複雑な調整をしないとイケないのだと思います。こういう立場に置かれた人たちの複雑さをリアリティーをもって読み取れるかどうかは分析の鍵で、そこは分析焦点者にキチンと向かい合うと、データを介して、自分の予見をいれないようになる。データを見ていけばいいし、今日いろいろな人々出たもっともっと複雑で大変な部分というのがあるのだと思う。そのあたりのことをインタビューで聞けたかの問題もあるような気がするけども。基本的には、そういう立場にある人たちの複雑な経験をできるだけトータルに理解していくというのが分析の深みにつながっていく。そうやって分析すると、キャリアのいろんな概念がでしゃばってでてくるのではなく、解釈を通して、意味付けられるような展開になりそうだなと思う。

10. 感想

この度は定期研究会での発表という恵まれた機会をいただき、誠にありがとうございます。SV の林葉子先生には、ご体調不良のなか何度もお指導いただき、感謝の念に絶えません。今回の発表で、先行研究の概念から離れてデータを分析していくこと、始点と終点のイメージをもつこと、データ分析の過程で再度分析テーマを練り直すこと、データの特性も配慮して分析焦点者を限定すること、など多くの貴重なことを教わりました。また、発表の後で3つのことに気づきました。1つ目は、発表後の懇親会では、発表時にも増して先生方から深いコメントが聞けることです。2つ目は、回収資料には先生方から多くのコメントを記載していただいております。記載されたコメントを改めて読み返すことで理解が深まりました。3つ目は、発表を聞いていただいた聴衆の先生、あるいは聴衆ではなかったがこの研究会に興味を持たれている先生方から、発表後にコメントをいただけることでした。改めて、M-GTA 研究会の定例研究会で発表させていただくことのインパクトの大きさを感しました。今回の分析結果は一度白紙にし、もう一度木下康仁先生の本を読み返しなが、再分析してまいりたいと思います。ありがとうございました。

【SV コメント】

林 葉子（(株) JH 産業医科学研究所）

1. 目的と研究テーマ、分析テーマ、M-GTA との適合性について

岸田さんのご研究は、定年後、再雇用された高齢者が非常勤であり、短期間という今までの状況とは違った仕事生活をどのようにしていこうとするのか、その過程を解明しようとするものです。高齢者の再雇用者を増やそうとするなか、大変、意義のある研究テーマだと思います。

最初の SV では、分析テーマが縮小的ジョブクラフティングという考え方にとらわれてい

て、初めから答えがわかってしまっているか、または、先行研究でいわれているような結果を求めているのと同じようであることを指摘しました。

2 度目には、ずいぶんと良くなりましたが、まだ、ある考えにとらわれていて、再雇用の状況しか見えてこない結果となっていました。なかなか一人では考えの切り替えしは難しいですね。私自身もなかなか良い案がでず、発表当日になってしまいました。いろいろな方がご指摘くださったように、どうしても、職場目線、仕事男性からの視点から抜け出れなくてもがいていращやるようすが見て取れました。こういった状況はよくあることですので、発表して、いろいろな方から助言をいただくと良い案がでてくるものです。最後に、たくさんのご意見をまとめたかたちで、木下先生から良い分析テーマを提案していただきました“分析テーマの絞り込み”はとても大切な作業です。しかし、分析テーマの絞り込みは絞り込むのではなく、フォーカスするところを絞り込んでいく、つまり、テーマを小さくしていくのではなく、自分の研究目的に合わせて、分析テーマを調整していくことです。現に、木下先生がご提案くださった、“大企業において、定年再雇用者になっていくプロセス”という分析テーマは、岸田さんが設定した分析テーマより範囲が大きいように感ずるかもしれません。岸田さんの分析テーマは、ある程度、岸田さんが予想していた結果をもりこんでしまっている分析テーマであったように思えます。ですから、その範囲を超えたものは得られないということです。

分析テーマを決定していくためには、本当に何を知りたいのかを自問することが大切です。既存の理論や概念にとらわれずに、分析焦点者のため、または、分析焦点者を支援する人々のために実際に利用できるような理論の構築するためにはどのような視座から分析していくのかを熟考して、分析テーマを調整していくことが必要でしょう。

2. 分析結果

最初の分析結果は類似した概念をカテゴリーごとにまとめたような形の結果図になっており、M-GTA の分析方法をもう少し学習していただきたいと思いました。発表で、過去に KJ 法を使って分析した経験があるというお話を聞いて、混ざってしまったのではないかと思います。

M-GTA を用いた分析は、研究者自身が一番、自分の知りたいことを語ってくれた対象者を 1 事例選んで、丁寧に概念を作成し、この 1 事例でわかる限りの結果図まで作成するのが、正しい分析方法です。インタビューしたすべての事例で概念を創って、それをカテゴリーに“まとめる”というやり方にするのは間違った分析の仕方です。しかも、概念を作成していく過程で、この概念に関係ありそうな概念を模索していくと、概念間のプロセス（影響関係）も検討していきます。1 事例で出来上がった仮の結果図は、2 事例、3 事例・・・と分析をすすめていくうちに、新たに概念が追加されたり、カテゴリーが変わったりしていくうちに、だんだんリアリティーに近い形に自然に整っていく実感を得られるでしょう。私はそれを自分なりの飽和化と思っています。

岸田さんも、最初は前の論文で利用した概念をカテゴリー別に分類する KJ 法のような結果図を作成していましたが、SV を 2 回する間に少しずつよくなってきていました。しかし、時間が足りず、KJ 法と M-GTA とがまざったような結果図になってしまったように思います。

さらに、分析テーマから推測すると、岸田さんが、ある一つの観念にとらわれすぎていたため、データから重要な部分を見落としてしまっていたために、M-GTA で分析したことで得られるリアリティーがでてこなかったのかもしれませんが。また、M-GTA では分析焦点者の視点が重要です。なぜ、分析焦点者はそのような行動をとったのか、さらに、そういう考えにいたったのかを、丁寧に分析焦点者の立場から、対象者の語りを通して解釈していく作業を続けていく。その視点があるから、分析焦点者のための理論が構築できるのだと考えます。せっかく、良いデータをお持ちのようですし、木下先生から良い分析テーマの案をいただいたので、すべてのデータを自分目線で切り捨てないで、分析焦点者の目線に立って、再度分析しなおして良い結果をだしていただければと思っています。岸田さんは、この数週間の間にあれだけ進歩したのですから、かならずや M-GTA の分析方法を自分のものにし、高齢再雇用者や再雇用しようとしている企業の方のために、実際に利用できる実践的理論を構築することができると、私は期待しています。頑張ってください。

◇各地の M-GTA 研究会活動報告

中部 M-GTA 研究会 2018 年度の活動報告

長山 豊（金沢医科大学、中部 M-GTA 研究会事務局長）

中部 M-GTA 研究会が発足して 2 年が経過しました。当研究会では、①研究発表会・総会（春）、②分析ワークショップ（夏）、③講演会（冬）を甲信越、北陸、東海の 3 つの地方ブロックを巡回して開催しております。News Letter No.92 で第 2 回研究発表会・総会についてはご報告させて頂きましたが、改めて 2018 年度の中部 M-GTA 研究会の事業として、活動報告をさせて頂きます。

第 2 回研究発表会・総会（通算第 4 回研究会）

2018 年 4 月 21 日に聖隷クリストファー大学にて開催し、参加者は 21 名でした。2 名の研究発表を行いました。1 人目は、鈴江智恵さん（一宮研伸大学看護学部）の研究テーマ「ベテラン認定看護師の役割獲得プロセス」、2 人目は、浅野いずみさん（愛知県立大学看護学研究科博士後期課程）の研究テーマ「発達障害児を育てるブラジル人の母親のトランジションプロセスに関する研究」でした。中部 M-GTA 研究会では少人数でのディスカッションが可能であり、研究動機・背景について丁寧に確認を進めました。特に研究の意

義として、どのような人がこの理論を活用するのか、どのような支援やサービスに役立つのか、参加者間で意見交換を重ねました。分析テーマの検討では、分析焦点者の特性や役割をもう一度見つめ直し、最終的に変化のプロセスの終点としてどのような状態に移行するのか、時間をかけて再検討しました。これらの議論によって分析テーマが参加者間で明確に共有されました。その後の分析結果の検討において、1番重要で外すことはできない中核となる「うごき」はどれか、全体のプロセスとどのように関係しているかという視点で、意見交換を活発に行うことができました。

第5回合同研究会（通算第5回研究会）

2018年9月1日～2日にかけて第5回合同研究会が開催され、中部M-GTA研究会はホスト研究会として事務局運営を担いました。東京、西日本、北海道、九州、沖縄、中四国、中部の各M-GTA研究会より総勢123名の会員が参加し、講演や分析ワークショップを通して、M-GTAに関する学びと親交を深めました。データ提供者の皆さんからディテールの豊富なデータを提供してもらい、一連の分析プロセスを体験しました。この合同研究会における分析ワークショップでは、データの文脈を解釈し、概念を生成し、再びデータに戻り確認するということを繰り返します。データと概念を何度も行きつ戻りつしながら解釈を深める、**grounded on data**の分析がいかに重要であるか、改めて気づかされました。全国の多様な分野の研究者との意見交換を通して、多様な解釈に刺激を受けたり、複数の概念の関係性について共に試行錯誤しながら集約していく分析プロセスの醍醐味を実感できる貴重な学びの場となりました。さらに、全国のM-GTA研究会の会員同士が交流を深めることで、今後の皆様の研究活動のネットワークが広がるきっかけを掴めたのではないのでしょうか。合同研究会に参加して頂いた全国のM-GTA研究会の会員の皆様、研究会の運営にご支援・ご尽力を賜りましたM-GTA研究会(東京)の根本愛子先生、事務局の及川様、信州大学のスタッフの皆様に心より御礼申し上げます。

第2回講演会（通算第6回研究会）

2019年1月13日に金沢歌劇座で、立命館大学の安田裕子先生に「過程と発生をとらえるTEA（複線径路等至性アプローチ）—TEMを中心に—」についてご講演いただきました。参加者は32名で、他地域の研究会（東京・西日本・九州）から12名も参加されており、皆様の関心が非常に高いテーマでした。TEAの特徴として、人間を開放システムと捉え、個人に経験された時間を重視するという立場が説明されました。人間の行動・選択や経験の径路は多様で複線的に広がるが、その場に特有な歴史的・文化的・社会的な影響を受けて定常状態に等しく辿りつくという等至性という概念を、研究事例を踏まえて非常に分かりやすく教授していただきました。

後半では、「自分が大学院に行く選択をした経験」をテーマに参加者同士でインタビューを行い、大学院に行くという等至点に至るまでの人生の径路を図式化するというワークを

行いました。実際に図に分岐点を描いてみると、その時に自分が置かれていた状況から多様な影響を受けていたことに気づき、なぜ自分が大学院に進学したのかというストーリーが紐解かれていくような体験をしました。時間経過に沿って人生が分岐していく径路を描くという、TEM の分析プロセスを参加者同士が体験的に学ぶ貴重な機会となりました。

中部 M-GTA 研究会は、顔の見えるアットホームな研究会として今後も活動を続けていきます。当研究会では、M-GTA による研究を支援するとともに、多様な質的研究の方法論的な学習の機会をつくっていきます。他地方の M-GTA 研究会の会員の参加も歓迎しておりますので、ぜひお気軽にご参加して頂けたら嬉しいです。各事業への参加、当研究会への入会をご希望の方は、研究会ホームページ (chubumgta.work) をご確認ください。うえ、事務局 (chubumgta@gmail.com) までご連絡ください。どうぞ、今後とも、中部 M-GTA 研究会をよろしくお願い致します。

◇近況報告

(1) 氏名、(2) 所属、(3) 領域、(4) キーワード、(5) 内容

- (1) 佐名木 勇 (さなき いさむ)
(2) 群馬県立県民健康科学大学 看護学部看護学科
(3) 看護技術学
(4) 慢性疾患患者のセルフマネジメント、退院支援、心理的支援・教育的支援技術
(5) 2 月の定例発表会に出席した際に SV や諸先輩方から頂いた様々な助言を糧に、修論の投稿に向けて頑張っております。木下先生の書籍は何度読み返しておりますが、定例発表会を聴講し、発表者の視点や考えを聞くことで、書籍だけでは得られない学びを参加するたびに得ることが出来ています。
- M-GTA の疑問としては、理論的メモノートの方法、理論的飽和化の判断が未だ理解出来ておりません。今後も定期的に定例発表会に参加して、M-GTA の学びを深めていきたいと思っております。貴重な発表ありがとうございました。

.....

◇次回のお知らせ

2019 年 7 月 20 日 (土) 第 12 回修士論文発表会

時間 : 13 : 00 ~ 18 : 00

場所 : 大正大学 (西巣鴨キャンパス) 4 号館 2 階 421 教室

.....

◇編集後記

今回、久しぶりに SV をさせていただき、発表者の方と一緒に登壇させていただきました。世話人の先生方を始め、フロアの方々が、それぞれの発表者の研究について自分の研究のように真剣に議論し、温かいコメントを寄せてくださったこと本当に感謝いたします。改めて M-GTA 研究会の一員であること幸せに思いました。

(田村朋子)